

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	橋本 彩
論文担当者	主 査 若林 一郎
	副 査 垣淵 正男
	副 査 金澤 伸雄
学位論文名	強迫症に併存する身体醜形症の異種性に関して、 臨床像や治療反応性などの後方視的調査による多角的検討
<p style="text-align: center;">論文審査の結果の要旨</p> <p>強迫症(OCD)と身体醜形症(BDD)は、5つの疾患から構成される強迫症および関連障害群(OCRD)に含まれるが、両者の関係性に関する知見はいまだ少ない。本研究ではOCD患者を対象にBDDとの併存を調査し、双方の発症順序を分類してその臨床像を検討した。</p> <p>OCDの診断基準を満たした92例に面接を行い、BDDの生涯罹病の有無を調査した。そしてOCDとBDDのいずれが先行発症したかにより群別し、各群の臨床症状や心理検査結果、治療反応性などを後方視的に比較した。</p> <p>OCD患者の12例(13%)にBDDの併存を認め、OCD先行群が5例、BDD先行群が7例であった。両群とも女性が多く、BDD先行群の方が年齢が高い傾向があった。OCD先行群では、チック症や抜毛症、皮膚むしり症といった身体集中反復行動症の生涯罹病が高率で、特にチック症は有意に高率であった。また、OCD先行群では強迫症状やBDD症状にも対称性に関するこだわりが共通して見られた。一方、BDDが先行した場合、不安症、パーソナリティ障害などの併存、あるいは美容外科への受診歴がより高率で、巻き込み行為、引きこもり、自殺企図、衝動行為などの行動的問題がより顕著であった。またBDD先行群の強迫症状では、汚染/洗浄、確認などの典型的なものが主であった。治療に関しては、SSRIの有効性はBDD先行群でより高率の傾向で、SSRI抵抗性の場合の非定型抗精神病薬による増強療法への反応性は両群で見られ、最終的な改善率は両群でほぼ同等であった。</p> <p>本研究はOCD患者での発症様式をOCD先行とBDD先行で分類して臨床症状、心理検査結果、治療効果を比較したユニークな研究であり、OCD患者に併存するBDDの発症順位による異種性の存在を指摘した点で貴重な研究と言え、臨床的意義も大きい。</p> <p>以上の理由により、本研究は学位授与に値するものと判断した。</p>	